

# 月讀

坂東正沙子

2019年6月7日 - 18日

ギャラリー176



## 月讀

『死を考えると、生きるとは死に向かうこと』

タイトル「月讀」は夜を統べるものとして月を神格化した日本神話の神です。

私にとって夜は精神と親和するものであり、自身と向き合う大切な時間となります。

また、夜は闇を生む時間でもあります。その闇は不明瞭で捉えられず、恐怖をもって私たちが包むため夜は死のイメージと結びつきます。そして昼=生、夜=死として一日の周期と同じように生物もまた生まれては死ぬことを繰り返すと考えます。

死ぬことは次の新しい生命誕生の準備です。しかしそれがいつ訪れるのか、知ることはできません。そのため、常にそれが身近に存在していると認識し受け入れておかななくてはなりません。

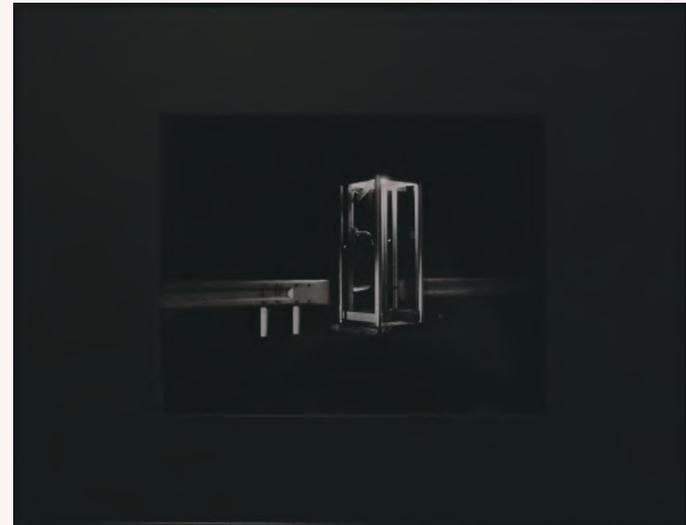
怖ろしく、避けたいものとして存在する死に対して前向きに考え、どう迎えるかを再認識するための写真群です。

自身の死と同様、大切な存在の死も耐え難いものです。

だからこそ想像し、考え、その時が来るのを準備して迎える必要があります。

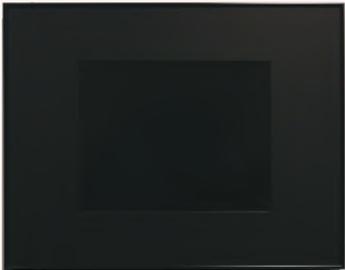
死生観を反映した写真のイメージを通じて観る者が死を感じ、死について考えることで「今」という生の実感や尊さを思い起こすきっかけを生む作品です。

坂東正沙子



















坂東正沙子

プロフィール

写真家  
大阪府在住

2008年 個展「sublimate」 galleria-punto (岡山)  
2009年 グループ展「同時代展」 同時代ギャラリー (京都)  
2019年 個展「月讀」 gallery176 (大阪)

web サイト

<http://masakobando.com>

スナック

まさこ

176



入り口の布越しから見た様子



最終日に訪れた方々と坂東さん



「本当はもっと展示会場を暗くしたかった」とイベント中に電気を消して実演した時の様子



ギャラリーの正面(夜)

展覧会開催中は毎日作家が在廊し、18:30 から毎晩展示会場において、イベントを開催しました。

この Bar 形式のイベントは、トークショーを行うよりも来場者一人一人とコミュニケーションを大切にしたいという作家の思いから、「スナック まさこ」として坂東自ら来場者にドリンクなどを振るまい、ゆるやかな雰囲気の中展示作品や写真のことなどを語り合う、相互的な交流会です。

最終日が近づくにつれ、一時は会場が満員になるほど多くの方が訪れるなどとても賑やかな会となりました。



参加者にドリンクを振る舞う坂東さん

# 写真展『月讀』を見て、

Text : momomi

坂東正沙子さんとはこの展覧会以前に一度お会いし、その際に「今度個展をするのでよければ来てください。」と展覧会『月讀』のフライヤーをいただいた。そのフライヤーにはモノクロで何かの骨が写ったイメージが使われていた。

当時の私はモノクロ写真と言えは荒々しくざらついたようなテクスチャーをもつ写真の印象が強く自分の中にあり、どこか敬遠しがちで、反対にあっさりとしたカラーの写真を好んで見ていた。そのためおそらく坂東さんから直接お誘いいただいていたなければこの展覧会には行けていなかっただろうとも思う。しかしもう一度いただいたフライヤーを見てみると、そのイメージは頭のない鳥の骸を撮っているにも関わらず、グロテスクさというマイナスイメージよりかは、どこか淡淡とした印象を受け、彼女の作品を実際に見てみたいと思った。

展覧会も後半に差し掛かった頃、『月讀』の作品を見にギャラリー176へ伺った。階段を上がってすぐに会場全体の暗さに驚いた。入り口近く

まで感じていた死とは別物で、マイナスにもプラスにもならないとてもニュートラルな彼女の死生観であった。

同じ「死」をテーマにしたクリスチャン・ボルタンスキーの作品である「モニュメント」シリーズを前にした時、どうしても目を背けたくないような居た堪れない気持ちになる。けれども坂東さんの作品は、これほど死を扱っているのに居心地が良いのはなぜだろうか。実際夜になると展示空間の真ん中で毎晩彼女によるスナック形式のイベントが開催されており、最終日近くになると多くの来場者が時間を忘れ遅くまでそこで寛いでいた。おそらく『月讀』の作品は死と生を自然のサイクルと考える彼女が撮った写真だったからだろう。

2018年から写真による作品作りを再開した坂東さんは、この『月讀』以外にも作品を制作されており、それらの作品は彼女のホームページ上で鑑賞できるようになっている。『月讀』以前に制作した『Aerial』はリアリティをそこにあるものでは

には長方形の幅が2メートルくらいはありそうな黒くて薄い布が天井から吊られていた。その布から透けておぼろげにしか会場全体を見渡すことができない。布には白い石のようなものがばらばらに黒の背景の中に写っていた。

写真作品は布の手前に一点、奥の展示空間にフライヤーにも使われたイメージを含む十一点が左右の壁に別れて展示されていた。さらに会場の一番奥の壁は闇の中に雲とともに白く浮かぶ月が写されている布で覆われており、まるで会場全体をその月が照らしているような印象を受けた。入り口の布からその中に入ると、二つの大きなイメージと写真作品で四方が囲まれるような空間となっている。

全てのイメージは半分以上が黒で構成されており、かつ写真作品においては額もマットも黒で統一されていた。そのためスマートフォンで展示風景を撮影すると黒色の四角が等間隔にべたべたと貼り付いていつように写った。そうこの展示は実際にその場に訪れないと「見れない」展示なのだ。薄暗い中で黒が大半を占める作品をみるのは容易ではなく、特に一つの作品は文字

なく、脳が構成するものという結論に至り、脳が作り出す像を現実の世界の中で捉えたカラーの作品である。この制作の手順は、撮る前にイメージをあらかじめ決めてそのイメージに即した場所を探して取りに行ったという『月讀』のそれと似ている部分がある。

また『NORMCORE』（直訳で「究極の普通」）では、日常の中の生と死両方が写されている。それらの作品はページ上で、見た者が毎回変わる並び順から自由にストーリーを想像することが出来る工夫がなされている。このように彼女は生活をする中で私たちが普段考えてこなかったような、しかし人間の本質的な事を気づかせてくれる作品を制作されていると私は感じた。

生き物である以上「死」とは誰にとっても平等に必然的な唯一のものである。薄暗い中で彼女のニュートラルな死生観を反映した作品を鑑賞することは、普段あまり意識を向けることのないそれに対して、考えるきっかけを与えている。

通り写真も真っ黒であった。ずっとその作品の前に居て見続けていると、徐々に目が慣れ黒の中にも様々な階調の黒が浮かびあがってくるのだ。微かに何かが写っているのが見えてきたが、何が写っているのかはわからない。これほど時間を要し目会場場の暗さに慣らしつつ、一つ一つの作品と向きあうことは、どんなに気がいった展覧会であってもしてこなかったかもしれない。

全ての作品をひと通り見終えた後、入り口のそばにあるこの展覧会の前書きを読みに行った。そこで彼女は「怖ろしく、避けたいものとして存在する死に対して前向きに考え、どう迎えるかを再認識するための写真群です。」と自身の言葉でこれらの作品について記していた。しかし、私には死と向きあうというよりも個々の作品と向きあった、という感覚が強く残っていた。それは私の死生観で「死」とはどうしてもネガティブでしかなかったからである。それぞれ作品は黒であり、闇が写っていた。あるものには死そのものが写っていた。しかし写されたものは私がこれ



iPhone で撮影した展示風景

